

第72回 国際理解・国際協力・多文化共生のための高校生の主張コンクール東京都大会 金賞

晃華学園高校 2年

稲村 瑠華

課題③

多国間主義は、今どのような課題に直面していると思うか。多国間主義は今後必要なのか。

副題

医療は国境を越えるかー国際医師免許から考える多国間主義の課題と可能性

私は5歳のころから原因不明の体調不良に悩まされていた。学校に通うのもつらく、複数の病院で検査を受け、検査入院もしたが、はっきりとした診断はつかなかった。

そんなある日、小さなクリニックの一人の医師が、食べ物との関連に気づいてくれた。ようやく「重度の食物アレルギー」という病名が判明し、私はようやく日常生活を取り戻すことができた。

この経験を通して私は思った。もし、もっと多くの医師の知見がつながっていたら、もっと早く苦しみから解放されていたのではないか。

世界には、原因の分からない不調に苦しみ、正しい診断や治療にたどりつけない人が大勢いる。命を前にして、情報や制度の壁がそれを妨げているのだとしたら、それは変えなければならない現実だ。

私は将来、医師となって世界中の人々の命を救いたい。その思いから医学部進学や医師免許制度について調べるうち、国ごとに免許制度が完全に分かれており、特例を除いて他国ではそのまま働けないという事実を知った。

さらに、アメリカ留学中に現地のクリニックで予防接種を受けたときの経験も、私の考えを後押しした。診察も注射も、すべて看護師が行ってくれたのだ。日本では考えられない光景に、私は驚いた。

国が違えば制度も違う。でも、病気も、苦しむ人の命も、国籍には関係ない。

命を前にして、制度が壁になるのはおかしい。私はそう強く感じた。

この問題は、現代の多国間主義が直面している課題の一例でもある。感染症、戦争、気候変動など、国

境を越える問題に対して、国際社会は協力して対応しなければならない。しかし、各国の制度や利害の違いが協力を阻んでいる。医師ライセンス制度の閉鎖性もその一つだ。

新型コロナウイルスのパンデミックでは、医療従事者が自由に国境を越えて支援に向かうことは困難だった。

もし制度の壁がなければ、助けられた命はもっと多かったはず。

そこで私は、「国際免許制度」の必要性を提案したい。WHOなどの国際機関が主導し、一定の臨床能力と倫理基準を満たす医師に対して、複数国での診療を可能にする共通の資格を与える。これにより、パンデミックや人道危機の際に迅速な国際医療支援が実現するはずだ。

また、デジタル技術の進展により、医療と教育のかたちも変わりつつある。オンライン診療が普及すれば、患者は病院に行かなくても医師の診察を受けられ、体調面・経済面の負担も軽くなる。医学生も、国境を越えて高度な授業を受けられるようになるだろう。しかしその一方で、診察中にトラブルが起きた際、誰がどの法律のもとで責任を負うのかといった法的課題も存在する。こうした制度整備には多国間の協力が不可欠だ。

さらに、医師の自由な国際移動が進めば、豊かな国に医師が偏在し、貧しい国で医師不足が深刻化するという懸念もある。それを防ぐために、私はWHOが主導して緊急時のみの対応を行う現在のネットワークの仕組みではなく、「国際病院ネットワーク」を創設し、医師をローテーションで派遣する仕組みを提案したい。遠隔医療を活用すれば、地理的な制約を超えて、緊急時にも迅速な支援が可能になる。また、フリーランス医師の国際的な活躍を支える制度も整備すべきだ。現在、多くの国でフリーランス医師は社会的信用が低く、制度にも組み込まれていない。しかし、WHOなどの国際機関が認証や支援を行えば、個人で国を超えて働く医師の活躍の場が広がる。私たちは今こそ、「医師は一つの病院に属すべき」という固定概念を取り払う必要がある。

私は、こうした制度改革の実現に向けて、将来は医師としてだけでなく、制度を変える側の一人としても働きたい。

命に国境はない。だからこそ、医療制度もまた、国境を越えていかなければならない。多国間主義の真価が問われる今、医療の分野から新たな国際協力の形を築くことが、未来の命を救う第一歩になると私は信じている。